

イギリス、ロンドンのRoyal College of Art (RCA、王立芸術大学院)、Innovation Design Engineering 学科の博士課程に所属している、吉本英樹です。前回のレポートから約七ヶ月が経ちました。この期間を振り返りながら、こちらの生活をレポートしたいと思います。

研究の進捗

10月から今年度が始まりましたが、今年も研究テーマは常に色んな方向に行ったり来たりを繰り返して来ました。それまでは人と環境とのインタラクションということの中核に据えていましたが、ではどういったインタラクションを創りたいのか、自分の提案としては（漠然としていますが）人がものをただ道具として使うのではなくものを尊重してものと調和するような関係を築きたい、それはどうすれば実現するのか、1つの提案としてはものに生命や魂を感じるようなデザインを考えることでそれをリスペクトするような関係が築けるのではないかと、ものに宿る魂とは何なのか、それはどういう時に感じるのか、どうすればそれを再現できるのか、文化や宗教的な背景はどう影響するのか、といった具合に色々な問いを経ながら右往左往し、最終的には神道の本を読んだり、かなり予想していなかった道すじを辿っています。結局重要なことは、だからといって神道の研究をするということではなくて、こういう飛び火のように発散した思考や実験が、あとから見返してみると一筋に通って見えて来ることなのだと思います。発散の内容の90パーセントは結局論文にはならないけれど、その発散をしたことによって今まで見えなかった10パーセントの部分に筋の通った道を切り開くことができるということが、すくなくともRCAの我々の学科では大切にされているように感じます。リサーチとは、未知のものに挑むからリサーチであって、それはもう体当たりで試行錯誤して発見するしかないし、特にデザインでは科学のような絶対的な真が無く、あくまでデザイナー個人の視点を通して世界を捉えるしか方法が無いので、なおさらその個人が個人なりの試行錯誤をして他人を納得させられる理論と作品を（発見ではなくて）組み立てて行くというのが、ここで取るべき方法論なのだと思います。

今の時点で見返してみると、「生命にインスピレーションを得たデザイン」という普遍的なテーマに対して、オーガニックデザインやバイオミクリーといった手法が確立されてきたけれど、今までのデザインは技術的な制約から形状や質感での表現に限られており、生命の「振る舞い」を表現するデザインという分野を新しく開いていくことができるのではないかと、というのが自分の根本の立場だと考えています。その上で、文字通り生物の振る舞いを真似たものから、神話にあるように現実の自然には存在しないけれど生命を見出せるものまで、生命というものを色々な角度から捉えて物のデザインに落とし込んでいく、というのが自分が今やっていることだと思っています。

生活の近況

研究とも関連しますが、四月にミラノサローネという世界最大のデザインフェアがミラノで開催され、RCAは毎年そこに展示会場を持つのですが、その中の1つとして昨年制作した作品を展示することができました。一週間で数千人という人が我々の展示を訪れ、今回の展示をきっかけにして次の大きな展示のきっかけも生まれました。ミラノサローネの間中はミラノの街じゅうでこのような展示が行われますが、この規模のデザインフェアはやはり日本では到底できないもので、せっかくヨーロッパでデザインを勉強できる立場を得たからには、こういった場所でどんどん積極的に世界にアピールしていこうと決意を新たにすることができました。

ミラノから帰ってからはロンドンで二回目の引越しをしました。前の家も気に入っていましたが、どうせならロンドンの違うエリアにも住んでみたいと思い、西ロンドンから北東の方にやってきました。こちらは家具が基本的に備え付けな上に礼金のようなシステムもないので、引越しはとても気軽です。新居のまわりは若者が集まるエリアで、お店が沢山あって大きな市場もあり、賑やかで楽しい街です。

イギリスも冬が終わり、一気に夏めいた気候になってきました。とはいえ、湿度が低く温度もそれほどは上がらないので、これからの季節はとても過ごしやすくなります。さらに緯度が高いので夜は10時ごろまで明るく、それだけでもかなり楽しい時期です。またこの夏はいよいよオリンピックです。実は柔道とバレーボールのチケットを購入できたので、今からかなり楽しみです。今年もロンドン生活を存分に楽しんで行きたいと思います。